所属	心理学研究科　　臨床心理学専攻　　修士課程	修了年度	2024 年度
氏名	阿部　瞳	指導教員（主査）	笹川　智子准教授

論文題目	**他者からの肯定的・否定的評価に対する恐れが自己開示に及ぼす影響**

本 文 概 要

【問題と目的】社交不安症（SAD）は，他者から注目を受ける 1 つ以上の社交場面に対して，著しい不安や恐怖が見られることを特徴としている（American Psychiatric Association, 2022）。SAD を有している人が，社会的場面や行為場面に対する恐怖および回避を持続させる認知的特徴として，他者からの否定的評価に対する恐れ（FNE）と肯定的評価に対する恐れ（FPE）が挙げられる（Weeks et al., 2008）。先行研究（例えば渡邊他，2020）では FNE と FPE が高いことにより，人から悪く思われたり，逆に良く思われすぎて葛藤関係が生じることを恐れて，自己開示が抑制されることが示されている。自己開示とは「個人的な情報を他者に知らせる行為であり，相手にわかるように自分自身をあらわにする行為」と定義されており（榎本, 1997, p.1），他者との親密な関係性を結ぶ上で重要なプロセスである。本研究では，社交不安が高い人ほど FNE と FPE が高いために自己開示を行わないという仮定のもと，社交不安の程度で群分けを行い， FNE と FPE が自己開示に与える影響を明らかにすることを目的とした。また，自己開示は特に対人交流の初期段階における親密化のプロセスと関連することが知られているため（加藤，2007），相手との親密段階の要因を考慮した上で分析を行った。

【方法】大学生 213 名を対象に，無記名式のオンライン調査を行った。調査材料は（１）フェイス項目，（２）Social Interaction Anxiety Scale 日本語版（金井他，2004),（３）Short Fear of Negative Evaluation Scale（笹川他，2004），（４）Fear of Positive Evaluation Scale 日本語版（前田他，2015），（５）自己開示尺度（丹羽・丸野，2010）であった。（５）は自己開示の深さを，レベルI：趣味に関する内容，レベルII：困難な経験，レベルIII：決定的ではない欠点や弱点，レベルIV：否定的な性格や能力に分けて測定しており，Iが最も浅く，IVが最も深い自己開示を仮定している。さらに開示対象者として，「初対面の人」と「これからさらに仲良くなりたい友人」をそれぞれ想定させた上で，自己開示の程度について回答を求めた。なお，研究は目白大学人文社会科学系研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号：23 人研-016）。

【結果と考察】対象者を低社交不安群と高社交不安群に分け，層別相関を算出した。加えて，社交不安の低群と高群のそれぞれについて，FNE と FPE を独立変数，自己開示の各レベルを従属変数とした重回帰分析を実施した。その結果，低社交不安群では FNE と自己開示の間に正の相関が見られ，重回帰分析では従属変数を初対面の人に対するレベルIIIの自己開示とした際，FNE の正の影響が見られた。高社交不安群では FNE，FPE と自己開示の間に負の相関が見られ，重回帰分析では従属変数を初対面の人に対するレベル I の自己開示とした際，FPE が自己開示を阻害することを予測することが明らかとなった。以上の結果から，低社交不安群では FNE が高いと自身の弱点に関する自己開示は促進され，高社交不安群では FPE が高いと趣味などの肯定的な内容の自己開示が抑制されることが明らかになった。不安が高くない人は，弱点を伝えることを戦略的に使っていると考えられ，SAD の傾向がある人も，弱点を伝えるという自己開示を積極的に行うことで，他者との関係を深めることができると考えられた。また，趣味などの肯定的な自己開示を安全に行える環境を心理面接等の中で設け，肯定的なフィードバックを必要に応じて繰り返しながら FPE にアプローチしていくことで，自己開示を促進し，社交不安の症状を軽減できることが示唆された。